伊勢金剛寺の霊石伝説 ―白大夫の袂石

小林幸夫

キーワード
金剛寺　袂石　石の霊異　白大夫伝説　伊勢比丘尼

要約
伊勢山田の金剛寺は、かつて真言宗寺院であったが、明治の廃仏毀釈にあって、今はない。その境内には袂石が祀られていた。白大夫度会春彦が、流罪の菅原道真にしたがって、九州太宰府に赴いた帰途、須磨袖が浦で拾った小石が、成長して巨大になったという。石の霊異をかたる伝説が、金剛寺に残されていた。この伝説の伝承伝播について、伊勢比丘尼に論点をしぼって述べてみたい。

（一）伊勢比丘尼と霊石伝説

伊勢の白大夫や比丘尼については、何度か取りあげて論じてきた。(1) それをくり返すつもりはないが、論じ残したことはある。石の伝説がそのひとつ。今もわからぬところの多い課題である。行き先が見えているわけではないが、考え方のすじみちだけは立てておきたい。すでに論じたことと、かさなる処もあるが、できるだけ重複はさけて、論点を石の伝説および比丘尼にしぼってゆこう。石が神を宿す、と信じられた時代に、伊勢比丘尼も諸国に石の伝説を残している。袂石伝説もそのひとつである。

まずは現代に伝わる伝説から取りあげて、できるだけ課題を明確にしておこう。熊野市五郷町大井谷に残されている「たもと石」の伝説である（『東海の伝説』・昭和四十八年刊）。

大井谷は、山深い山村である。そこに、フクジマ石という有名な丸っこい石がある。その大きさは、直径六メートルくらいもあろうか。大井谷の旧家福島家の前に、小川が流れており、なかばそのせせらぎをせき留めるように、フクジマサマは横たわっている。

フクジマサマの上には、多少の土がおおいかぶさっていて、いろいろな雑木や草が生い茂っている。福島家で聞いてみると、だいぶ昔のことらしいが、先祖に為右衛門という人があり、お伊勢参りをしたことがあった。その帰途ふとたもとに入ってきた小石があったというが、神さまの思し召しと思って、たいせつに持ち帰ったという。

ところが、そのたもとへ入るような小石が不思議に少しずつ大きく成長して、人々を驚かした。これは伊勢の神さまに違いないというので、小川の清いところにおまつりした。福島家では、毎年十一月五日を祭日にして、フクジマサマのお祭りを怠らない。

熊野市大井谷の旧家福島家の前に「フクジマサマ」という大石が横たわっている。誰かはしらず、福島家にちなんでそう名づけたとおもわれる。先祖がお伊勢参りをしたとき、袂へ入ってきた石を持ち帰ったところ、次第に大きく成長したという。これが「たもと石」の由来である。この石を伊勢の神さまとして、毎年、十一月五日、祭りしているという。袂へ入ってきたといい、みずから成長するといって、石の霊異をかたる伝説である。それが伊勢と結びつけられるのはなぜか。たとえば、伝説をもち歩いたのが、伊勢信仰を宣伝する宗教者であったのか、そう考えてはみるものの、資料が少なくてとても判断はつきかねる。課題は、伝説の伝承伝播にあるのだが、さらにいえば、石の霊異こそが問題なのだ。以下、その霊異をかたる伝説をいくつかあげてみよう。

『日本伝説名彙』は、右の伝説を「袂石」と分類している。(2) 同じような話が、久留米市大石町字速水に鎮座する「伊勢天照御祖神社」に伝わる。『筑後志』がそれを記録している。

社家伝へていふ。往昔大石越前守、今の神体の霊石を懐にして、伊勢国より此地に来り伊勢大神宮と崇め祭れりと、又一説に古昔一老尼ありて、小石を袖にし来りて此地に棄つ。其石漸々肥大し、慶長年間に到り、其径方九尺、別に一箇の石方三尺、厚三尺なるがあり、里民天照大神と崇め、伊勢御前と称し、小祠を創立すと。何れか正説なるを知らず。年歴も亦詳ならず。

大石越前守が伊勢より持ちかえった霊石を伊勢大神宮として祀った。あるいはまた、老尼が伊勢より持ちかえった石、成長して天照大神と崇め祀ったという。『久留米市誌』（上巻）は、この地の「伊勢天照御祖神社」について、『諸社十実抄』なる書物を引いて、つぎのように解説する。

＜諸社十実抄＞伊勢御前神社は延喜式に御井郡伊勢天照神社とあるは是か。今は三潴郡に属す。所祭神荒祭宮・天照大神宮・豊受大神なり。建立年月詳ならず。伝に云国司越前守某伊勢大神宮の瑞籬の内なる小石と神庫の古鏡を申請て此地に祠れりと云（神宝に大石あり）謹て按るに、当社を古記に伊勢御前神社或は天照御前神社と記し、今は大石御前と称せり、

神宝として、伊勢神宮の石と古鏡を蔵しているという。俗に当社を「伊勢御前」、あるいは「大石御前」とも称するという。大石越前守にちなんだ命名なのだが、小石が大きく成長するゆえ、大石御前とつけられたのだろう。御前とは女性につけられる。それならば祭神は、もちろん女神である。現に「御祖神社」とは、女神のことをいう。(3) あるいはまた、この伝説を宣伝して歩いた比丘尼を称して、大石御前とよんだのかもしれぬ。五来重氏は、『石の宗教』のなかで、「袂石」を取りあげて、熊野比丘尼が神体の小石を持って遊行し、熊野信仰を伝播して歩いた、としている。(4) それならば、右にあげた石の信仰と、伊勢および熊野は、どのように結びついているのか。疑問は尽きないが、伊勢の伝説を取りあげて、石の霊異について考えてみよう。

（二）西行谷神照寺の巨石

「袂石」ではないが、伊勢の内宮ちかく、西行谷に大きな石の伝説がある。なんと熊野から飛んできた石という。『勢陽雑記』にその伝承が紹介されている。

俗説に、三十年計り以前天くだりとて、五尺四方程の岩石藪の中に有り。又或は云ふ、熊野神倉に有りし石、爰に飛行し来ると云々。熊野の神倉から飛んできたという。神倉といえば、新宮神倉神社の「ごとびき岩」が連想される。その本願・妙心尼寺は、伊勢の本願・慶光院ゆかりの寺である。[5] この比丘尼は、熊野から出たという。

内宮岩井田に近い西行谷に、尼寺・神照寺があった。明治維新までは比丘尼が寺を守ってきた。[6] 今はもう跡もないが、その林藪のなかに、この巨石はあったという。この尼寺は、巨石をなかだちとして、どうやら熊野ともつながっているようだ。神照寺は退転してないが、かつて寺宝に『熊野の本地』の写本を有していた。[7] それならば、この尼寺は、熊野につながる伊勢比丘尼の寺と考えていい。明治維新以前まで、この寺の比丘尼は、二月十六日、西行法師の命日や、彼岸のとき、宇治の町まちを、勧進に歩くことを許されていた（『秘木草紙』「西行供養」）。西行谷の巨石のことを記録した『勢陽雑記』は明暦二年に書かれた。とすれば、それ以前に、すでにこの石の俗説は流布していたと考えられる。『勢陽五鈴遺響』（度会郡「西行谷神照寺」）には、

又俗伝ニ天ヨリ降タリト云フ五尺許ノ巨石、林叢ノ中、松ノ朽株ノ傍ニアリ。或云三十年前明暦年中、熊野権現ノ神庫ニ収ムル処ノ石ニシテ此地ニ飛来レリト云。

と記されてある。この記述からも、当時、伊勢の人々が、熊野権現と神照寺のつながりを想定していたことがうかがえる。もちろん石が飛んでくるはずはない。こちらは天より天降ったという。どちらにしても石の霊異をかたることでは同じだ。もちろん、この巨石の俗伝をはこんできた宗教者がいるはずである。比丘尼寺・神照寺の旧址にこの巨石が残ることをおもえば、比丘尼のしわざと考えていい。熊野と伊勢を往来していた比丘尼が、この西行谷に定住したのではないか。もちろん推定にすぎないが、もうしばらくかの女たちが残した伝説の痕跡を追いかけてみよう。

熊野の石といえば、『塩尻』（巻之三十七）には出羽の「袂石」伝説が記録されている。

出羽延沢銀山の隣郷中島村熊野の祠は、文禄年中に村の民熊野七度まふでせし、那智の浜にて一小石を拾ひ帰国せし、年月を経て其石大になり行ほどに、八十年来母石は一拱余りになり、形老嫗のごとしとて姥石といふ、此石より児石分する事、二千余にて年々にかさなりふとりて、太郎石、次郎石、孫石大小あり。小石は皆卵の形に似たり。是を崇めて今熊野というよしかゝる事もあるにや。

熊野那智の浜で拾って帰った石が、年々成長したばかりか、太郎、次郎、そして孫にいたる、子（小）石まで生みふやしたという。その

形、老嫗のごとし、といって姥石と名づけられたのだが、おそらく、その名のごとく、石をもち歩いた女性宗教者のかかわりが推定できる。熊野の祠に祀られているのだから、熊野比丘尼とも考えられるが、判断の材料が少なすぎる。

袂石、姥石、そして西行谷の巨石、いずれもが石の霊異をかたる伝説である。ひとくちに霊異とはいっても、さまざまにバリエーションがある。この話の伝播に、比丘尼が関与しているとすれば、なんのためにかの女たちは石の霊異をかたったのか、そのことを明らかにする必要がある。伊勢山田の金剛寺の袂石は、それを考える材料を提供してくれるている。

（三）金剛寺の袂石

山田の船江町金剛寺に巨大な石の伝説が残されている。白大夫にまつわる伝説である。『勢陽五鈴遺響』（度会郡「金剛寺」）から一節を引いてみる。

海蔵寺ノ西ニアリ。禅宗相伝。古昔ハ弘法大師開基ニシテ真言宗ナリ。今禅宗尼僧代々住ス。子院多シ。本尊虚空蔵菩薩堂前左傍ニ鎮守天神祠稲荷祠アリ。天神祠ノ檀上ニ巨岩アリ。其上ニ小祠ヲ建伝云。度会春彦（俗云白大夫）菅公太宰府ニ左遷ノトキ随従シテ播州ニ至ル。同州袖ケ浦ノ海瀕ニシテ一小石ヲ懐ニシテ携帰ル。後歳々長シテ巨嵒トナレリ。故ニ此祠ノ下ニ置テ天神ヲ祀ル処ナリト云。其岩大六尺計。青蒼ニシテ海嵒ニ似リ。今猶存ス処ナリ。又宝暦中松木度会高彦一禰宜ハ菅公ニ奉仕処ノ春彦ヨリ七十余世ノ後裔ナリ。其家蔵ニ元徳年中奉覧度会系図一巻アリ。又菅公ノ画像アリ。俗ニ云其頭ハ茶箋髪ニ類シテ頭巾ノ如キヲ被リ白色ノ直衣ヲ着セラル。是自画ニシテ春彦ニ所賜ト相伝ヘリ。寛文年中火災ニ罹リテ烏有トナリ惜ムヘシ。（以下略）

本尊・虚空蔵菩薩の堂前に天神の祠あり。その壇上に巨岩ありという。往古、菅原道真、太宰府に左遷の折、白大夫・度会春彦が、その側にしたがった。下向の途次、白大夫は播州袖ケ浦にて、拾った小石を懐にして持ち帰った。それを天神の祠の傍らにおいたところ、その石、成長して長大になったという。それが金剛寺の巨岩である。

金剛寺は、廃寺となって今はない。もと真言宗で弘法大師の開基になるという。文禄四年（一五九五）に再興されて、臨済宗となった。外宮鬼門除けの寺で、尼僧寺であった。[8] 松木時彦の『正続神都百物語』は、この寺についての事情をもう少し補ってくれる。

明治二年住尼帰俗して廃寺となつた船江町江西山金剛寺は、元禄九年三方会合所調査書に、本寺及塔頭正応軒岳仙庵、慶金庵、福田庵、竹泉庵、花蓮院とあり、宝永七年寺院改には、江西金剛寺本尊虚空蔵前田光明寺末禅開基不詳とある。元来本寺は松木男爵家の支配寺で有つたのを享保三年十一月故有つて光明寺に移した。

（中略）　此の巨岩は白大夫春彦神主の墓だから、古来松木家の支配だと確信する。

不明な点が多すぎるが、それでも元禄期から宝永期の事情がかろうじてわかる。かつては松木家の支配寺であったというが、支配寺とはどういうことか、これだけではわからない。さらに松木神主家とこの比丘尼寺とのかかわりなど、詳しい事情はわかりかねる。もうひとつ、境内の巨岩を、「白大夫春彦の墓」としている。しかし今のところ、白大夫の墓とこの比丘尼寺とを結びつけるものは、何もない。ただこの石は、白大夫が比丘尼寺に残した足跡のひとつといってよかろう。もちろん石をもち帰ったという白大夫の問題は残る。白大夫春彦は、伊勢神宮の神官にして、御師である。それについてはかつて論じたので、[9]ここでは比丘尼のことに限って述べてゆきたい。

山田に住した比丘尼のことが、松木時彦『神都百物語』に記録されている。伊勢の「勧進比丘尼」について述べた記事である。

この山田比丘尼は岡本町と岩淵町松木とに親比丘尼が本陣を構へ、貧民の子女を貰ひ受けて之れを養育し、受持区域を定め、子比丘尼を引率して米麦の喜捨を乞ひ、毎年一度代表として熊野山へ参詣し、牛王を受け来る。之れを年籠の浄業と称していた。併しながら彼らが内容を穿てば、矢張り私娼の臭気は免れ得ずである。

山田岡本町と岩淵町に比丘尼が本陣を構え、毎年一度、子比丘尼を連れて、熊野へ参詣し、牛王札を得て帰ってきたという。おそらくかの女たちは、熊野比丘尼の流れをうけた伊勢比丘尼なのだろう。[10]おなじく『神都百物語』には、慶光院三代・清順尼は、岡本町密厳庵に居住していたと記している。この清順尼は、熊野比丘尼であったという記録もある（『宮川夜話草』）。岡本町は、比丘尼の住まいする処だったのか。また岩淵町松木には、『蟄居紀談拾遺』によれば、白大夫度会春彦を祀る祠があった。

春彦の小祠岩淵郷松木の町小家の間に形かはり有けるを、今の長官智彦卿小家を退け土地を広く築き殿舎を造立有て寛延三年九月十一日遷宮あり（「春彦称二白大夫一」）

岡本町は、外宮の東南、勢多川中流の両岸に位置した。岩淵町は、岡本町の北、勢多川の東南に接するという。岡本町から岩淵町あたり、勢多川をはさむようにして、比丘尼が居住していたとおもわれる。そして岩淵町には、白大夫の祠が祀られていた。こうした記事の断片から、比丘尼と白大夫をつなぐ勢多川の川筋が見えてくるようにおもう。そして金剛寺のあった船江は、勢多川河口の町である。つまり勢多川の川筋に白大夫伝説は残り、それを伝える比丘尼寺があったのである。

これだけで、金剛寺の白大夫伝説と山田比丘尼のつながりを説明するのは、あまりに不十分である。もう少し、金剛寺についての検討が必要である。

（四）金剛寺の恵康尼

伊勢市立図書館が所蔵する資料に『宇治山田市史史料　寺院篇1』がある。『宇治山田市史』二冊を刊行するにあたって、収集した資料群を分野別に整理したものである。市史二冊も宇治山田の歴史を学ぶ

ためには、今でも必須の文献であるが、この市史史料群も、細部にわたってたいへん貴重なものである。その寺院篇に「船江三橋氏旧記」（以下「旧記」と記す）が収められている。これは「金剛寺」の中興縁起である。今、そのあらましを「市史史料」の解説にしたがって抜書きしてみる。

寺伝ニ云フ弘法大師ノ開基ニシテ真言宗ナリシガ、其ノ後漸次ニ衰運ノ傾キシニ、文禄四年（三三二年前）十二月恵康尼再興シテ禅宗臨済派トナリ、代々尼僧タリ。恵康尼俗名きんト云ヒ、豊臣秀次ノ妾ニシテ、文禄三年、秀次山田ニ落チ来リ、松木神主家ニ寄食シ、後チ当寺ニ潜居セシガ、翌年京都ニ帰ル日、きん女ト会シテ落飾シテ当寺ヲ中興セシムト。

寺庭ニ袂石ト称スル長四尺巾二尺許ノ青蒼色ノ石アリ、伝ヘ云フ、度会神主春彦、菅原道真ノ左近ニ従ヒシ後チ、暇ヲ乞ヒテ帰国セシ時、播磨国袖ケ浦ニテ、小石ヲ拾ヒ袂ニ入レテ持チ帰リ、此ノ所ニ置キシニ、不思議ナルカナ年々長シテ、終ニ大石トナレリ。故ニ其ノ側ニ菅公ノ祠ヲ建設シタリト。今猶其ノ寺跡ノ存シ、周囲ニ垣ヲ廻ラセリ。

前半が恵康尼によって中興された金剛寺の縁起。後半が白大夫の「袂石」伝説となっている。この「旧記」の本文は、意味の通じにくいところもあり、真偽のさだかではない記述もある。たとえば、文禄四年、豊臣秀次が山田に逃げ落ちてきて、「きん女」（のち落飾して恵康尼となる）と契りを結んだ、というのも、眉つばもので、信じがたい。一篇の貴種流離譚のごとき体裁をとっていて、いかにも疑わしい。かつてこの「旧記」を取りあげて、注解をくわえながら金剛寺について述べたことがある。[11] 今はそれにしたがって、金剛寺の比丘尼についてまとめておきたい。

「旧記」は、御巫尚書が、嘉永三年五月十七日に借覧して写したものを、御巫清在が、大正十三年五月にあらためて書写したという。「船江三橋氏旧記」と題されているが、三橋氏についての詳細は不明である。本文の冒頭に、

元祖三橋氏は、三州白井並柳郡出生にて、猿狭（ママ）山に引籠、三橋弥右衛門好集、三橋彦兵衛好唯は、由緒有る侍なれば、秀次公へ加勢し家臣と成り、勢州度会郡伊良胡崎へ、秀次公趣給ふ時、奉供仕、伊良胡崎に引移り居止りける。

とだけ紹介されている。伊良胡は、『神鳳鈔』に、「三河国。伊良（外宮）御厨は、神郡神戸より上る租税御贄等凡て大神宮所用の雑物を貯へ置く所」（本田安次著作集第七巻「神楽Ⅶ」）とあるように、外宮の御厨の地である。[12] 伊勢大神宮の末社、伊良胡大明神勧請の地に、「きん女」、のちの恵康尼は生まれた。こうして「旧記」は、恵康尼による金剛寺中興の来歴をかたる。

ここに「旧記」の要点をまとめておこう。前稿で注釈をくわえながらまとめたものを、しめしてみる。[13]

①箕曲郷は、むかしより松木氏の領地であった。

②「奥西郷」の森にまつられる船江上社は、水の神をまつる。

③船江上社の境内社箕曲氏社は、度会氏の遠祖「天牟羅雲命」をまつる。

④金剛寺は、外宮豊受宮の鬼門をまもる。

⑤金剛寺に菅神の祠が勧請され、境内の石に白大夫伝説が残る。

⑥船江の比丘尼寮を、恵康尼が金剛寺として中興開基した。

箕曲郷船江上社の境内に、箕曲氏社がある。当社は、度会氏の遠祖、天牟羅雲命を祀っていた。その名のごとく水の神を祭り、洪水や旱魃の害の少なからんことを祈念したのである。船江にあった比丘尼寮「西星寮」を、秀次の思い人「きん女」こと、恵康尼が、金剛寺として中興開基したという。この比丘尼寮に、少将井天王、波利賽女とともに、宇法童子（雨宝童子）を祀っていた。「雨宝童子」とは、朝熊山の護法神とされ、天照大神の化身と考えられた。[14] 朝熊山で修行した空海が、天照大神十六歳のすがたを感得して、刻んだといわれている。伊勢神宮ゆかりの神を、金剛寺（西星寮）の比丘尼は祀っていたのである。

「きん女」は、剃髪して比丘尼寮「西星寮」に入り、恵康尼を名のった。そして開いたのが金剛寺である。それ以前から、「西星寮」にいた比丘尼は、少将井天王、波利賽女などの疫神や雨宝童子をまつっていた。それらの神々の祀りを受けついだ金剛寺は、神仏習合の寺であった。その金剛寺の境内に、袂石は鎮座する。松木氏はそれを「白大夫度会春彦の墓」とする。「旧記」はつぎのように袂石の伝説をのせている。

松木春彦白大夫大明神、菅丞相の筑紫にて御別れ被遊候節、為御形見、御姿彫刻し、御姿絵姿の石壱ツ給り、白大夫袂に入れ、筑紫より帰らせ給ふ。壱ツの石此社地に納祭り給ふ所、大石と相成により、袂の天満宮とも崇め祭る。又鎮守共奉祭り、正五九月には、松木氏より御供備る。菅丞相御姿は京都宮様に有之。御姿絵は山田の原箕曲の郷匂村にも有之と云。松木氏の支配せらるゝ社地なれは、町屋に縁無之。殊更大神宮の鬼門を守る社地なれは、かなる敵も押寄来る事叶まし。

金剛寺が松木氏の「支配寺」ならば、比丘尼もその支配下にあったと考えられる。松木氏が、白大夫春彦の形見を代々伝来してきたように、比丘尼も袂石の霊異をかたっていたのではないか。金剛寺は、外宮の鬼門を守る寺であった。ならばそこに祀られる白大夫の袂石は、外宮の町々を守護する神石と考えられたのではないか。松木氏がこの巨石を、「白大夫春彦神主の墓」と主張するのも、金剛寺が、外宮の鬼門を守る寺であることと結びついている。その袂石の霊異をかたりついできたのが、松木氏であり、その支配下の金剛寺の比丘尼であった。「旧記」の語る金剛寺縁起は、そのことを伝えている。

（五）依代としての袂石

ここにもうひとつ、白大夫の袂石伝説を記録する資料をあげてみよう。『伊勢両宮直道按内図会』は白大夫の袂石伝説を解説していう。[15]

檜尻より一二町南の方に、金剛寺といふ梵舎あり。此庭に小祠一社を建て、扉二つを開き、菅神の社、秋葉明神といふ。此社の下に、幅尺余長さ四五尺なる無底の石あり。是異形の石にして、伊勢渡会氏の先祖、白太夫大明神春彦神主の袂石と云ふ。徴交はなけれども、古老の伝、土俗の諺に、此石、上世、其始は春彦神主の袂に所持ありし石にて、形小分なるゆへ、此小祠の中に納めありしか、年歴の積るにしたがひ、次第に増長して、今は殿内に納めかたく、社の下に置といふ。考ふるに、春彦神主は、天慶七年正月九日薨去し給ひて、今年八百四十年に及へり。此年数にて、袂に入る程の石、今の如く生長すへき例なし。是等は土人奇異を語るの怪言なるへし。察する所春彦神主の霊は、山田松木町といふ所に、松木社といふて祭りあれとも、爰には春彦神主の墳墓など有て、霊社を祭り、碑石を社内に納め置たるにもあらんか。其の故は、爰の社、尋常の社にあらず。不格好にして奥行深し。石は納めされとも、初め営建の姿を今に写して造替するならん。尚菅神を祭る事は、春彦神主、人躰にてまします時、道真公とは格別なる由縁子細あるなれは、後世菅神を祭りて、碑石は社の下へ取出し、袂石と号けたるは、石の形中凹にして、両の方袖袂の如く見ゆる故、名付たるにもあらんか。又此金剛寺は、そのはしめ春彦神主の墓守にして、後代寺と変したるなるへし。今も春彦神主の苗裔、渡会松木氏より積地をあたへ支配する寺なり。尚外宮祠官等多くは此春彦神主の末裔なれとも、爰に此石ある事を知る者稀なる故、道のもよりに任せて按内するのみ。

白大夫がもち帰った袂石は、年数ふるうちに長大となり、小祠におさまらず、社の下に置くこととなった。その異常なる成長がかたられている。金剛寺は、春彦の墓守であり、松木氏の支配寺である。そこに祀られる石は、春彦の墓処とされる。一方、白大夫春彦の神霊は、山田松木町に、松木社として祀られている。これが一文の次第であろう。金剛寺が松木氏の支配寺であるとすれば、ここに住した比丘尼は、その支配下にあって、白大夫春彦を弔い、その行跡をかたって歩いたとおもわれる。その石は、比丘尼が奉ずる伊勢大神の依代と考えられたのではないか。

『勢陽五鈴遺響』（度会郡「岩戸裏坂」）には、つぎのような伊勢比丘尼についての記述が見える。山田岡本町にいたる岩戸裏坂に住していた比丘尼である。

岩戸ヨリ帰路ハ井谷ニ下リ宮崎ニ出ル。新古ノ道ハ変スレトモ共ニ岡本ニ至ルナリ。今ノ裏坂ハ一襴宜満彦闢ク処ナリ。又一名瞽女カ坂ト称ス。往昔此処ニ盲女ノ詣客ニ乞丐シテ常ニ居タル処故ニ名クト云。又伊勢比丘尼ト称スルモノ此地ニ娶リ居テ銭ヲ乞タリ。満彦ノ時禁止シテ退シムト伝ヘリ。又此坂ノ西ヲヘラリ坂ト称ス。或云幣振坂ノ訛ナルヘシ

この坂の比丘尼は、参詣客を相手にして、御幣を振りながら、占いのわざをして、銭を取っていた。幣振坂ともよばれるゆえんである。このように伊勢比丘尼は、卜占のわざをなりわいとしていた。かつて

は勢多川の近傍にいて、水の難、疫病の災いなどの安からんことを祈り、祓いしていた女性宗教者であった、その名残を伝える営みであろう。

金剛寺の比丘尼は、かつてその袂に石をしのばせ、その霊石を依代として、伊勢大神の功徳を説いて歩いたのだろう。そのとき、この霊石の不思議をかたったのであろう。それが白大夫春彦を遠祖と仰ぐ松木氏（度会氏）の支配下にある、金剛寺の比丘尼の役割であった。

石が飛ぶはずもないし、子を産むはずもない。おのずから成長するわけもない。それは知れたことだが、これらの霊異は、霊石であることをかたっているにすぎない。伊勢比丘尼は、この石を袂に入れて旅をした。それゆえ「袂石」と命名されたのであろう。比丘尼がこの石を、依代としていればこそ、石の霊異はかたられねばならなかった。伊勢比丘尼が、「大石御前」とよばれたのも、その霊石ゆえであろう。梓巫女は、弓を依代として霊を招いた。[16] ならば伊勢比丘尼は、袂石を依代として霊異を語っていたのだろう。熊野比丘尼が、神石を持って遊行したように、伊勢比丘尼は神の宿る霊石としてもち歩いたのである。[17] 少し想像をはたらかせすぎたようだ。ただ、伊勢比丘尼と霊石伝説の、すじみちをつけてみたのである。

［注］

（1）拙稿「伊勢の白大夫伝説」（「東海近世」第十七号）二〇〇八年三月　同「度会春彦本縁」（「東海学園　言語・文学・文化」第七号）二〇〇八年三月　同「西行谷の比丘尼－伊勢比丘尼と西行伝説－」（「西行伝説の説話・伝承学的研究」第三次）平成十六～十九年度科研費補助金基盤研究（B）（1）研究成果報告書。二〇一一年三月

（2）柳田国男編『日本伝説名彙』（日本放送協会編）一九五四年

（3）松前健『日本の神々』（中公新書）一九七四年

（4）五来重『石の宗教』（講談社学術文庫）二〇〇七年

（5）五来重『熊野詣』（講談社学術文庫）二〇〇四年

（6）拙稿（1）「西行谷の比丘尼－伊勢比丘尼と西行伝説－」（「西行伝説の説話・伝承学的研究」第三次）

（7）拙稿（6）論文

（8）拙稿「伊勢の白大夫伝説」（「東海近世」第十七号）。同「伊勢の白大夫伝説－山田の御頭神事と陰陽師－」（「東海学園大学研究紀要」第十六号）二〇一一年三月

（9）拙稿「伊勢の白大夫伝説」（「東海近世」第十七号）二〇〇八年三月　同「度会春彦本縁」（「東海学園　言語・文学・文化」第七号）二〇〇八年三月

（10）拙稿（1）「西行谷の比丘尼－伊勢比丘尼と西行伝説－」（「西行伝説の説話・伝承学的研究」第三次）二〇一一年三月

（11）拙稿「伊勢の白大夫伝説－山田の御頭神事と陰陽師－」（「東海学園大学研究紀要」第十六号）二〇一一年三月。本稿に「船江三橋氏旧記」を翻刻紹介してある。

（12）本田安次「伊勢神楽之研究」著作集第七巻『日本の伝統芸能』所収。
（13）拙稿「伊勢の白大夫伝説－山田の御頭神事と陰陽師－」（「東海学園大学研究紀要」第十六号）
（14）『朝熊山金剛証寺典籍古文書』（金剛証寺編）一九九四年。久保田収「天照大神と雨宝童子－朝熊山の信仰を中心に－」（民衆宗教史叢書第一巻『伊勢信仰Ⅰ』所収）一九八五年。西山克『聖地の想像力－参詣曼荼羅を読む－』（「胎金両部世界の旅人－伊勢参詣曼荼羅－」）
（15）伊勢市立図書館所蔵『宇治山田市史史料　寺院篇1』所収
（16）C・ブラッカー『あずさ弓－日本におけるシャーマン的行為』岩波現代選書　一九七九年
（17）前述した大石越前守が伊勢より持ち帰ったとする伝承からは、伊勢の御師の関与が考えられるが、それについては「伊勢の白大夫伝説」（「東海近世」第十七号）で論じたので、ここでは取りあげない。

（東海学園大学人文学部人文学科）

“The Legend Magic Stone at Isekongouji-Temple”
－ Tamotoishi of Hakutayu －

Yukio KOBAYASHI

Key words：Kongouji Temple, Tamotoishi, the spiritual communion of stone, the legend of Hakutayu, Isebikuni

Abstract

Kongoji-temple in Ise Yamada was once a Shingon-shu sect temple, but no longer exists as a result of the abolishment of Buddhist temples and Buddhism in the Meiji-Era. In the temple, there is a huge “tamoto-ishi”. A legend in Kongoji-temple tells of the strangeness of the stone. This study, focusing, on Ise Bikuni (a Buddhist Ise nun), examines the spread of the legend.